

ヒマラヤの孤児院

姫路 斎木亀治郎

カトマンズから中国への国境まで中国の援助で舗装路ができて、中国のトロリーバスが走り始めた。カトマンズの街をはずれると、ヒマラヤから流れ出てインドの聖域ベナレスへそそぐ清流がある。河をわたって三〇分も走ると、なだらかな丘陵にさしかかる。沿道は一面の青田、その中にまっ赤にうれた唐辛子畑が点在して、広野の果てはヒマラヤの裾

野につながる。丘の上はチミという部落。ネパールには珍しい蔬菜畑があり、煉瓦や水甕を焼く窯場もあって、豊かな、小奇麗な街のたたずまいである。

街はずれの小高い丘の上に、SOSチルドレンスピレッジという孤児の村がある。径を登ると、孤児達が祈るヒンズー寺院があり、その広場に鯉幟が折柄の涼風をはらんで泳いでいた。

村に一人の「父」と呼ぶ老人に従ってゆくと、学校、集会場、売店、病院、図書館などが運動場をとりまき、それを囲んで一四棟の家がある。建物をつなぐ径はよく手入れされた

花園を縫い、花園には孤児達がつくる花が咲き乱れていた。それぞれの家にはマザーと呼ぶ婦人が九人の孤児の母親となり、男四女五、或いは男五女四と高年齢から幼児まで順序よく九人の孤児が配属され、兄弟姉妹として一家を形づくっているのである。質素だが清楚な住居、そのヒマラヤのみえる窓に雛人形が飾ってあった。学校の教室の壁に孤児達の絵があった。その色彩には孤児の暗さはみえない。一枚の絵に「これは日本から贈られた絵具で描いた」としてのされてあった。村には、ちょうど交代期で会うことができなかったが、日本青年海外協力隊から女子隊員が保健業務を奉仕しているのである。

SOSチルドレンスピレッジ運動は一独逸人の手によって一九四九年オーストリアに最初の孤児村がつくられてから、「孤児の村インターナショナル」という組織の手で今では世界中五〇カ国に百以上の村をもち、孤児達を育てているのである。示されている主旨は「孤児、貧困児を温かに又安全に家庭生活を味わせ、健康な生活と習慣を与え、充分な教育を施し、将来、国の経済的、社会的進歩に寄与せしめよう」というのである。

永い年月を世間にもてはやされるでもなく、黙々と孤児養育の道を歩みつづけてきたこの組織の奉仕を眼のあたりにして、世の中に多いそらぞらしい、形式的な、かけ声ばかりの運動をむなしく思いながら、いつまでも手を振る村人達をあとに丘を下った。ヒマラヤの裾野の山肌が紫色に変わりつつあった。